看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用の推進

平成29年度　看護学教育ＦＤマザーマップ・コンテンツ開発

10年後を見据えた グローバル人材育成・国際交流の推進

コンテンツ報告書 Vol.2

看護学教育研究共同利用拠点

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

目次

Ⅰ．はじめに　・・・・・・・・・・・2

Ⅱ．看護教育における国際交流　・・・・・・・・・・・4
　1．国際交流・海外研修プログラムに関する文献一覧
　　（1）科目活動
　　（2）学修成果
　　（3）看護・看護師の国際化
　　（4）語学研修・英語能力

Ⅲ．国際交流活動の実際（引率事例から）　・・・・・・・・・・・9
　1．竜巻警報による地下室への避難
　2．海外の気候や災害
　3．現地空港での乗り継ぎ便
　4．在宅患者宅へのアウトリーチ

Ⅳ．国際交流活動・海外研修における
　　危機管理について　・・・・・・・・・・11
　1．海外研修危機管理シミュレーションに関する
　　参考資料・ウェブサイト
　2．海外研修を前提とした国際関係科目の概要の一例
　3．海外研修危機管理シミュレーション展開例

Ⅴ．看護職が経験する異文化体験とその対応　・・・・・・・・・・24
　1．民間療法
　2．ハラル認証
　3．家族が病院に泊まりたい

Ⅵ．グローバル時代の看護系大学におけるFDとキャリア支援
　　－ 国際活動委員の教員の経験から　－　・・・・・・・・・・26

Ⅰ．　はじめに

1.概要

　大学改革が進む中、平成29(2017)年４月１日現在の看護系大学協議会会員校数は265校となっています。全国およそ800校ある大学の約３割に看護教育課程が設置されている状況になります。大学の国際化をはじめ大学改革においては、看護系大学の役割は益々大きくなってきているところです。千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターは、平成22年3月に文部科学大臣認定の看護学教育研究共同利用拠点（看護学教育分野ではわが国唯一の教育共同利用拠点）として看護学教育研究の質保証のシステム構築に取り組んできています。平成27年度までの5年間に、看護教育のためのFDマザーマップの開発を行い、平成27年度の最終年度には、FDマザーマップの活用推進のための、コンテンツ開発に取り組みました。その中の１つとして、教育マップの中の学生支援の項目に関連して、国際交流推進に関するコンテンツ開発を開始し、FDプロジェクト成果報告会「今こそ教員組織の教育力を高める」において「国際交流委員にあたってしまったら！」の報告、平成28年度には海外大学との交流協定書（MOU: Memorandum of Understanding）に関する全国調査を実施し報告してきました（10年後を見据えたグローバル人材育成・国際交流の推進 コンテンツ報告書）。平成29年度には、海外研修引率教員等へのインタビューを実施しました。
　本報告書は、「10年後を見据えたグローバル人材育成・国際交流の推進 コンテンツ報告書」のVol.2　になります。国際交流推進コンテンツ開発チームが引き続き取り組んだ、FDコンテンツ開発の成果を、看護系大学の教員と共有することで、日常のFD活動ならびに、学生支援の一助となることを願って、具体的に情報を整理したものです。ご一読いただき、さらに共有できる情報や、あるいは忌憚のないご意見をお寄せいただきたくお願い申し上げます。

2.目的

　FDマザーマップコンテンツ開発・国際交流班は、10年後を見据えたグローバル人材育成と国際交流推進のための、具体的なコンテンツ開発を目指しています。開発されたコンテンツの活用により、教員と学生のビジョンの明確化と、大学組織として地域社会のニーズに応え説明責任を果たす情報集約と組織的仕組みづくりを推進できることが期待されます。
　平成27～28年度の調査研究の取り組みから、わが国の看護系大学の約95%に国際活動（交流）委員会が設置されていること、しかし、担当教員の負担感は大きく、FD(Faculty Development)のニーズは高まっていることが示されました（平成27～28年度コンテンツ報告書）。そこで、本報告書（平成29年度コンテンツ報告書 Vol.2) では、安全面の旅行管理も厳しくなってきている背景もあるので、国際交流活動・海外研修における危機管理についてと、海外研修引率教員等へのインタビューの結果から看護系教員のＦＤとキャリア支援について取り組むこととしました。

3.FDマザーマップの位置づけ

　看護学教育FDマザーマップ開発プロジェクトの中のコンテンツ開発でとりあげた「グローバル人材育成・国際交流の推進」は、教育マップ２－６「学生支援」の中の「国際交流の推進」に関連したコンテンツに位置づけられます。

4.開発プロセス

　コンテンツ開発は、3段階で行いました。第1段階は、国際交流活動・海外研修における危機管理についての検討、第2段階は、引率教員等へのフォーカスグループ・インタビューを実施し、そのための教職員能力開発（FD、SD)をテーマとしました。第3段階では、国際交流委員としての課題と必要な情報や資料の集約を行い見える化を図るために、必要な教職員が自由に使える小冊子（本報告書、Web版）を作成しました。

5.開発組織

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター
文部科学大臣認定の看護学教育研究共同利用拠点
FDマザーマップコンテンツ開発委員
（国際交流班）

委　員	野地　有子	（千葉大学大学院看護学研究科　教授）
	溝部　昌子	（国際医療福祉大学福岡看護学部　准教授）
	近藤　麻理	（東邦大学看護学部　教授）
	小寺　さやか	（神戸大学大学院保健学研究科　准教授）
	野崎　章子	（千葉大学大学院看護学研究科　講師）
	炭谷　大輔	（千葉大学大学院看護学研究科　特任研究員）

6.グローバル人材とは

　グローバル人材の定義は多様である。文部科学省の報告書にある定義では、

「世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンテイテイを持ちながら、広い視野に立って培なわれる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」（産学官によるグローバル人材の育成のための戦略，平成23年4月28日）がある。

すなわち、グローバル人材に求められる能力には、
１．人間としての教養
２．語学力
３．異文化対応力
４．コミュニケーション力
５．価値創出力
６．ダイバーシティ（多様性）への協調性
７．社会貢献

などがあげられている。また、これらの能力を育成するための組織や社会のあり方も課題としてあげられている。地球の有限な資源のもと、多様性を受けいれて違いを乗り越え、ともに生み出す価値観を持った人を育てることは、看護教員にとって大きな課題といえる。

Ⅱ．看護教育における国際交流

1．国際交流・海外研修プログラムに関する文献一覧

2000年以降の論文を、前回（Vol.1）文献一覧分類とは違った視点で分けて一覧にしている。看護系大学における国際交流の現状と各大学における実践活動が分析されており、交際交流を始める時や、継続改善の参考にすることができる。

文献収集と絞り込み過程については、以下の通りである。

・収集基準：看護教育における国際交流活動に関について記述されたもの

・検索方法：医中誌Web、シソーラス検索統制語「国際教育交流」[I01-50-10-20]

・絞り込み：2000年以降、看護、抄録あり、内容的選別、前回作成リストの文献を追加（図1）

・分類：本論文の内容から

（1）科目活動

（2）学修成果

（3）看護・看護師の国際化

（4）語学研修・英語能力に分類した。(図2)

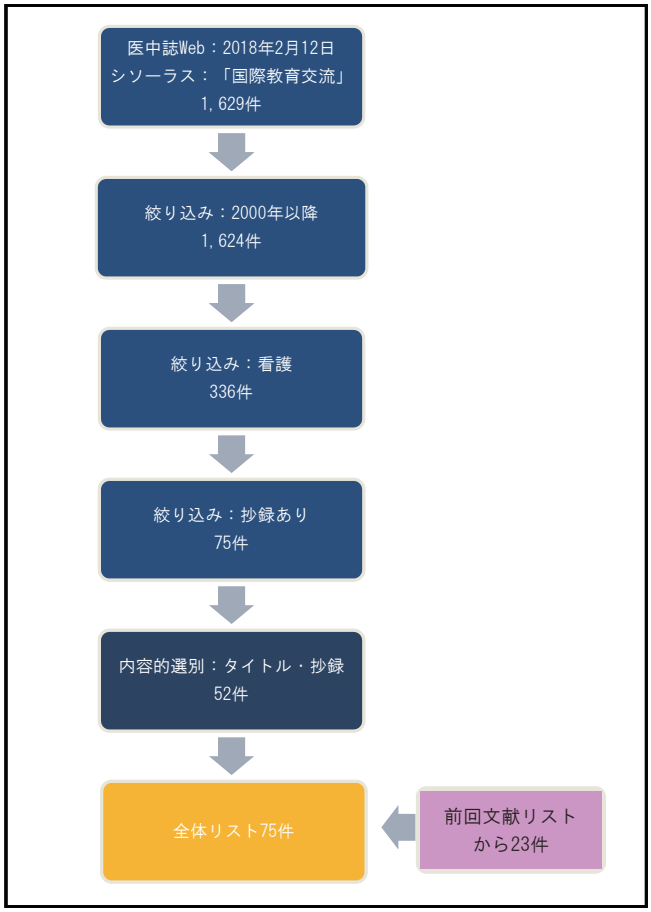


図1．75件の絞り込み過程

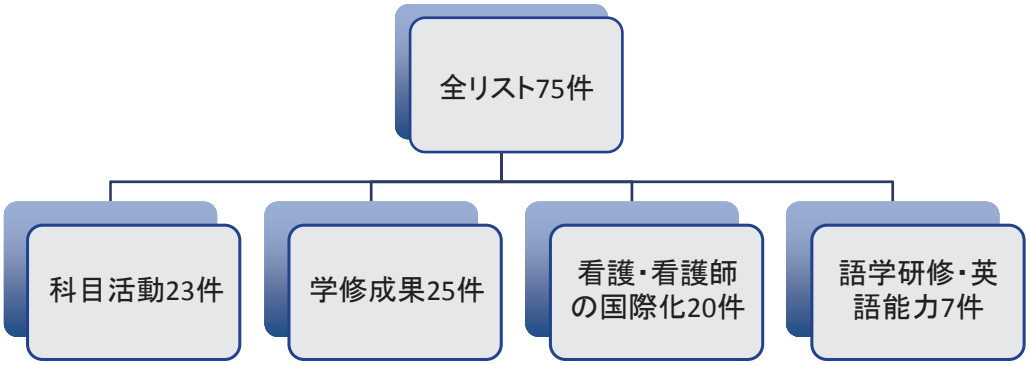


図2．カテゴリ別4分類

（1）科目活動

No	タイトル	著者	発行年	雑誌名/Page
1	国際交流経験のある日本人看護学生は、看護師として外国人に看護を提供する可能性を予測している(Japanese undergraduate nursing students with international exchange experience anticipate a probability of providing care to foreign nationals as a nurse)(英語)	Nishihara Mika, Tanaka Junichi, Manago Yuka, Sakata Kotsuki, Kubo Natsuwa, Ohnishi Mayumi	2017	保健学研究29巻 Page73-80
2	看護学科における国際交流活動の現状と課題(第3報)　米国ウォッシュバン大学看護学部との国際交流	上野 珠未, 有田 久美, 石橋 曜子, 大城 知子, 池田 智, 黒木 求, 宮林 郁子	2016	福岡大学医学紀要43巻2号 Page89-96
3	国際看護における実習の意義および教育効果の検討	須藤 恭子, 樋口 まち子	2016	国際保健医療31巻4号 Page333-345
4	フィリピン貧困地域における「国際看護学演習」の学生の学びに関する一考察	奥村 真美	2016	保健医療技術学部論集10号 Page93-104
5	保健医療支援のための異文化交流能力を学習する日本人看護学生へのサハラ砂漠以南の国際フィールドワークプログラム(An international fieldwork program in Sub-Saharan Africa for Japanese nursing students to learn intercultural competence for healthcare support)(英語)	Inoue Satoshi, Zingani Ellah, Akase Tomoko	2014	横浜看護学雑誌7巻1号 Page16-21
6	看護学科学生の海外研修の意義と課題　2012年度海外研修参加学生の学びから	花井 節子, 山下 美穂, 福岡 真理	2014	鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要18巻 Page86-96
7	平成24年度留学生交流支援制度(ショートステイ・ショートビジット(SSSV))による異文化看護(Transcultural Nursing)プログラムの取り組み　ソウル国立大学看護学部へのショートビジット(SV)	辻村 真由子, 野地 有子	2014	千葉大学大学院看護学研究科紀要36号 Page39-45
8	看護学教育における国際交流活動に関する学生の意識調査	西頭 知子, 月野木 ルミ, カルデナス 暁東, 小林 道太郎, 小林 貴子	2014	大阪医科大学看護研究雑誌4巻 Page96-104
9	プリマスでの3週間の短期語学研修プログラムが日本の看護学生に与えた影響(The Effects of a Three-week Study Abroad Programme in Plymouth for Japanese Nursing Students)(英語)	Mori Hisako	2012	日本赤十字豊田看護大学紀要7巻1号 Page85-96
10	サモア国立大学留学生を迎えての2009年度国際看護実習　学生の視点で考えた実習の成果	菊池 郁希, 竹村 麻紀, 宮澤 奈津美, 宮越 幸代	2011	長野県看護大学紀要13巻 Page61-72
11	ラオス国際看護学研修の学習成果と効果的な海外研修のあり方の検討	丹野 かほる, 瀬倉 幸子	2010	日本看護学会論文集: 看護教育40号 Page269-271
12	看護学部1年生に適用されたアクティブラーニングによる学習経験　フィリピンにおけるグローバル看護研修コースを介して(Learning Experiences with Active Learning Method Applied during the Early Years of Undergraduate Nursing Students: Through Global Nursing Training Course in the Philippines)(英語)	Oshida Yumi, Sasaki Satoshi	2016	創価大学看護学部紀要1巻 Page15-23
13	ザンビア共和国における実地調査プログラム　看護学生による健康セミナー(A fieldwork program in the Republic of Zambia: health seminar by nursing students)(英語)	Inoue Satoshi, Zingani Ellah, Ibuki Ai, Akase Tomoko	2015	横浜看護学雑誌8巻1号 Page49-56
14	タイ国、プラパ大学における国際看護論の実施と学習の成果	東田 吉子, 中田 覚子, 竹尾 恵子	2015	佐久大学看護研究雑誌7巻1号 Page65-74
15	2013年度カンボジア・スタディツアーでの学生の学び	木下 照子, 福岡 悦子	2014	新見公立大学紀要35巻 Page141-143
16	国際交流活動から得た学生の学び　2011年度カンボジアスタディツアー報告	木下 照子, 小野 晴子, 井関 智美, 三上 ゆみ	2012	新見公立大学紀要33巻 Page155-160

17	看護学科における国際交流活動の現状と課題― 韓国啓明大学看護学部との国際交流―	有田 久美, 大城 知子, 黒髪 恵, 石橋 曜子, 西村 和美, 山下 千波, 田中 美加, 黒木 求, 宮林 郁子	2013	福岡大学医学紀要 40巻(3/4) Page219-226
18	山形県立保健医療大学における看護学科交流事業の検討(第1報)	遠藤 芳子, 後藤 順子, 市川 禮子, 平塚 朝子, 井上 京子, 片桐 智子, 長浦 レイコ, 原 萃子, 二口 尚美	2004	山形保健医療研究7巻 Page67-73
19	学術交流協定による2006年受け入れプログラムの報告	園城寺 康子, 片岡 弥恵子, 奥 裕美, 鏑木 洋子	2007	聖路加看護大学紀要33号 Page39-47
20	シドニー大学看護学部での本学学生の研修―平成14年度研修に対する参加学生の評価―	森 雅美, 河合 洋子	2004	名古屋市立大学看護学部紀要4巻 Page41-48
21	看護基礎教育における海外研修の位置づけ　国際看護の視点から：タイ国、マハサラカム看護大学との相互交流から 学ぶ　専門職としての国際感覚	深井 喜代子, 近藤 麻理, 柴倉 美砂子, 笈田 将皇, 浅利 正二	2009	看護教育50巻5号 Page446-450
22	平成22年度台湾研修報告	山田 晧子, 小山 敦代, 矢野 恵子, 田口 豊恵, 永島 すえみ, 清野 たか枝, 青田 正子, 松川 泰子, 中村 真悠子	2012	明治国際医療大学誌6号 Page63-72
23	看護学生のカンボジア・スタディーツアーでの学び-日本NGOによる訪問診療に同行して-	永尾 理恵, 小見山 幸乃, 寶田 真美子, 岡 宏美, 古城 幸子, 川崎 泰子	2009	インターナショナル Nursing Care Research8巻3号 Page99-104

（2）学修成果

1	タイ・セント・ルイス大学夏期短期研修(2015)報告	鵜生川 恵美子, 巴山 玉蓮	2017	群馬県立県民健康科学大学紀要12巻 Page57-67
2	フィンランド・オウル大学看護学科と大阪大学医学部看護学専攻との学術交流セミナー報告	大村 佳代子, 上谷 千夏, 矢山 壮, 土屋 さやか, 山川 みやえ, 瀬戸 奈津子, 牧本 清子	2013	大阪大学看護学雑誌19巻1号 Page51-56
3	聖隷クリストファー大学看護学部における国際交流事業への取り組み　アメリカ看護研修に参加する学生の"activeness"をはぐくむ活動と課題	樺澤 三奈子, 炭谷 正太郎, 渥美 陽子, 小出 扶美子, 仲村 秀子, 成松 美枝, 鶴田 恵子, 聖隷クリストファー大学国際交流センター運営会議	2017	聖隷クリストファー大学看護学部紀要25号 Page11-18
4	看護基礎教育における国際看護学の教育プログラムの開発に関する研究　わが国の大学看護学科における国際看護学教育の実態	蛭田 由美, 久保 宣子, 山野内 靖子	2017	八戸学院大学紀要54号 Page39-54
5	保健師学生のための異文化看護学習プログラムの検討　ニュージーランドにおける看護海外研修の視察より	白石 知子, 大橋 裕子, 今村 恵子, 出口 みどり, 山田 知子	2015	中部大学生命健康科学研究所紀要11巻 Page57-64
6	アジア3か国における看護大学および関連施設の訪問から　部局間協定および学術・学生交流の実施にむけて	野地 有子, 野崎 章子, 飯田 貴映子, 辻村 真由子, 小川 俊子, 岩崎 弥生, 舘 祥平, 千葉大学大学院看護学研究科学術・国際活動委員会	2016	千葉大学大学院看護学研究科紀要38号 Page63-67
7	わが国の看護学生を対象とした海外研修の動向	谷野 宏美	2015	新見公立大学紀要36巻 Page85-87
8	カナダB/C州の看護学生海外研修報告	井澤 和代, 天野 雅美	2005	東京医科大学看護専門学校紀要15巻1号 Page67-72
9	米国海外研修の実施状況と効果(一般)	今村 桃子, 齊藤 博美	2000	聖マリア学院紀要15巻 Page91-93
10	韓国と国際交流の一例 ソウル大学校看護大学との学生交流	桜井 礼子, Shirley Gerald Thomas	2001	大分看護科学研究2巻2号 Page61-64
11	看護教育における海外研修の位置づけ　国際看護の視点から：韓国ソウル大学校との相互交流研修及び国際看護学教育	桜井 礼子	2009	看護教育50巻2号 Page164-167
12	名古屋市立大学看護学部とシドニー大学との学術交流　はじまりとその具体化作業	森 雅美, 生田 克夫, 勝又 正直, 中嶋 律子	2004	名古屋市立大学看護学部紀要4巻 Page25-30
13	看護教育における海外研修の位置づけ　国際看護の視点から：タイ、ラオス専門教育の中の海外研修　国際看護学実習	佐山 理恵, 高木 廣文	2009	看護教育50巻3号 Page256-259

14	看護教育における研修の位置づけ　国際看護の視点から　米国 シアトル・パシフィック大学における短期海外研修	横山 京子	2009	看護教育50巻1号 Page70-74
15	看護学生のための海外研修　12年間の実践を振り返る	平野 美津子	2005	聖隷クリストファー大学看護短期大学部 紀要 7号 Page49-60
16	Scramble Zone　異文化交流が看護教育にもたらす効果　日本の高齢者ケア実践を体験した台湾の学生の1か月研修プログラムの紹介	山川 みやえ, 渡邊 浩子, 牧本 清子	2014	看護教育55巻12号 Page1146-1151
17	看護学生の国際交流に関する意識調査	濱畑 章子, 片岡 由美子, 米田 雅彦, 平井 さよ子, 古田 加代子, 原沢 優子, 星野 純子	2004	愛知県立看護大学紀要10巻 Page27-32
18	看護基礎教育における「国際看護」教育の現状と課題	宮本 和子	2017	山梨大学看護学会誌16巻1号 Page1-5
19	看護学部学生の国際的活動に関するニーズ調査	田村 康子, 丸山 有希, 溝畑 智子	2016	神戸女子大学看護学部紀要1巻 Page27-35
20	「看護の未来」にむけた国際共同教育の実践　学術交流協定に基づく千葉大学とサンディエゴ大学の連携から	野地 有子, Hardin Sally Brosz, Gonzales Lucia, Curran Connie	2017	千葉大学大学院看護学研究科紀要39号 Page51-57
21	台湾中山醫學大學護理學系と看護学部との学生間国際交流システムの構築と課題	河津 芳子, 風間 眞理, 水野 千奈津, 石光 芙美子	2016	目白大学健康科学研究9号 Page77-84
22	モンゴルの看護教育事情　モンゴル国立医科科学大学との学術交流から	服部 直子, パグワ・ボヤンジャルガル , 奥津 文子	2016	関西看護医療大学紀要8巻1号 Page62-69
23	新見公立大学カンボジア会　10年間の活動報告	谷野 宏美	2015	インターナショナルNursing Care Research14巻4号 Page135-141
24	【看護学教育における国際交流の実態と課題】　日米の看護学生間の文化交流プログラム	Gaskins Susan W.	2002	Quality Nursing8巻6号 Page494-498
25	日本私立看護系大学の看護学教育における国際交流活動に関する実態調査	カルデナス 暁東, 西頭 知子, 月野木 ルミ, 小林 貴子	2013	大阪医科大学看護研究雑誌3巻 Page147-156

（3）看護･看護師の国際化

1	東南アジア4か国を対象に実施した看護教育制度に関する本邦集団研修の評価・課題・教訓	橋本 麻由美, 藤田 則子, 森山 潤, 深谷 果林	2017	国際保健医療32巻2号 Page83-93
2	BC州における居住者の健康管理から日本の保健師活動を考える平成23年度　海外研修を通して	栃本 千鶴, 鈴木 奈奈	2012	日本赤十字豊田看護大学紀要7巻1号 Page97-105
3	日本人看護師における国際経験を通じた文化的イマージョン　現状、今後の希望、自覚している障壁(Cultural immersion through international experiences among Japanese nurses: Present status, future intentions, and perceived barriers)(英語)	Chiba Yoko, Nakayama Takeo	2016	Japan Journal of Nursing Science13巻3号 Page378-390
4	外国で教育を受けた看護師の対人能力を推測するための対人能力判定ツールの利用(Using the Interpersonal Skills tool to assess interpersonal skills of internationally educated nurses)(英語)	Shen Jay J., Xu Yu, Staples Shelley, Bolstad Anne L.	2014	Japan Journal of Nursing Science11巻3号 Page171-179
5	看護の国際協力を推進するための看護教育のあり方　国際協力の経験をもつ看護職の調査結果をもとに	甲斐 仁, 佐伯 圭, 影山 隆, 草間 朋	2005	看護教育46巻2号 Page134-139
6	海外看護研修を終了した看護職の動向に関する調査　木村看護教育振興財団創立10周年を迎えて	長谷部 佳子, 込山 和子, 菊池 弘明	2002	看護展望27巻13号 Page1506-1510
7	【助産婦・看護婦のための周産期チームマニュアル】　理念に基づく教育　国際交流　開発途上国との看護交流	村上 睦子	2001	ペリネイタルケア2001夏季増刊 Page51-57
8	遺伝学,看護,公的政策の国際的な協議に向けて	グウェン・アンダーソン, キャサリン・Y・リード , リタ・B・モンセン	2001	看護53巻9号 Page50-53
9	韓国の看護大学における看護教育の体験	野村 志保子	2017	順天堂保健看護研究5巻 Page112-118
10	アジア諸国の家族看護学教育と研究の現状と国際交流の促進(The Current Status of Family Nursing Education and Research in Asian Countries and Promotion of International Exchanges)(英語)	Hohashi Naohiro, Kawahara Noriko, Kobayashi Kyoko, Ema Sachie	2009	家族看護学研究14巻3号 Page75-77

11	カンボジアの看護・助産師教育及び中核病院の現状と助産師が抱える課題―JICAカンボジア母子保健管理コースを実施して-	束田 吉子, 竹尾惠子, 宮地 文子, 清水 久美子, 堀内 ふき, 橋本 佳美, 弓削 美鈴, 上原 明子, 竹内 良美, 小嶋 淳史	2016	佐久大学看護研究雑誌8巻1号 Page109-117
12	米国東海岸大都市における外国人留学生や在留外国人に対するWomen's Health Careの現状からみた我が国の課題	斉藤 早苗, 辻本 裕子, 利木 佐起子	2014	ヒューマンケア研究学会誌6巻1号 Page77-80
13	医療労働者の国際移動と医療人的資源制作	佐藤 千鶴子	2009	立命館国際地域研究第29号 Page13-32
14	グローバル化したアジアの看護師と看護教育	織田 由紀子	2010	国際ジェンダー学会誌第8号 Page5-7
15	JICAダナン研修プロジェクトにおけるベトナム看護職への教育支援の経験:Cultural Competencyに着目して	嶋澤 恭子, 内 正子, 高山 良子, 新田 和子, 山本 和代, 竹橋 美由紀, 二宮 啓子	2017	神戸市看護大学紀要21巻 Page79-86
16	ウズベキスタン共和国への精神看護実習開始までの支援活動報告実習指導者へのヒアリングから	出口 禎子, 岡本 典子, Zohida Yunusdjanova	2012	北里看護学誌14巻1号 Page33-41
17	ウズベキスタン看護教育改善プロジェクトにおける支援活動報告日本とウズベキスタンによる精神看護学カリキュラム導入のプロセス	出口 禎子, 岡本 典子, 榊 恵子	2010	日本赤十字看護学会誌11巻1号 Page19-25
18	大学院ウィメンズヘルス・助産学専攻における国際協働論演習の拡大	新井 香里, 新田 祥子, 福富 規子, 江藤 宏美	2010	聖路加看護大学紀要36号 Page38-42
19	「プライマリー・ヘルスケアと看護」の国際研修に関する研究研修員の評価に基づく,国際研修のあり方の検討	内海 孝子, 森口 育子	2004	兵庫県立看護大学附置研究所推進センター研究報告集2巻 Page49-65
20	フィンランドの保健医療福祉制度及び看護事情から見る我が国の課題	栗原 明美	2017	順天堂保健看護研究5巻 Page86-93

（4）語学研修・英語能力

1	海外研修を通しての国際看護教育　学習意欲の変化と研修満足度	山口 善子, 寺岡 貴子	2013	看護教育研究学会誌5巻2号 Page42-48
2	本学看護学生における異文化体験を通してのコミュニケーション能力と英語学習意欲	森 久子, 鈴木 寿摩	2014	日本赤十字豊田看護大学紀要9巻1号 Page71-79
3	短期海外研修体験が看護学生の英語学習動機と学習意欲に及ぼす影響	香月 毅史	2011	高崎健康福祉大学紀要10号 Page47-61
4	海外学生研修の実施の意義と参加者のコミュニケーション意識平成21年度、愛知県立大学看護学部学生参加による研修の実施報告より	片岡 由美子	2010	愛知県立大学看護学部紀要16巻 Page49-57
5	看護学生の短期海外研修における英語学習に関する意識調査	香月 毅史, 荒井 淑子	2009	上武大学看護学部紀要5巻1号 Page12-18
6	学生海外研修の概要とその課題　平成17年度、愛知県立看護大学生参加による研修の実施報告	片岡 由美子	2006	愛知県立看護大学紀要12巻 Page59-66
7	科学の教育と英語の学習　ベトナムにおける分子生物学教育の紹介(Teaching science and learning English:an introduction to the Molecular Biology Course in Vietam)(英語)	Thomas Mayers, Brian K. Purdue, C. Kiong Ho, Osamu Ohneda	2015	Journal of Medical English Education14巻3号 Page87-92

Ⅲ．国際交流活動の実際（引率事例から）

1．竜巻警報による地下室への避難

海外研修中に引率教員と学生が大学の学生寮に居たところ、17時頃、現地大学の担当教員より電話があり、「竜巻警報が出たから解除されるまで学生を連れて、寮の地下に避難しなさい」と言われました。日本人学生や現地学生と一緒に寮の地下に行き、そこでおしゃべりをしたり、卓球をしたりして過ごしました。2時間程度経過した頃、現地学生が自室に戻り始めました。何も連絡が無いので、引率教員は自ら現地担当教員に電話をかけたところ、その現地担当教員もやっと自宅に帰ったところでした。そして現地担当教員より、「警報解除なので避難解除してよい」と言われ、研修学生と寮の部屋に戻りました。幸いな事に、竜巻の被害はありませんでした。しかし、全員、夕食を食べておらず空腹でした。そこで、学生と教員とでピザのデリバリーを注文しました。それまで竜巻については実感がありませんでしたが、その後は気にするようになりました。

2．海外の気候や災害

海外研修先の大学所在地は、数年前に大きな竜巻被害があり犠牲者も出ており、地域全体が竜巻に敏感となっていました。滞在中も天気予報では竜巻発生予測のことが長々と説明されていました。大学からも全学生・教職員向けに前日から注意のメールが届き、とうとう昼頃に警報が出され、大学から一斉連絡が入り、午後の授業は中止、避難せよとのメールが届きました。大学内循環バスも間引き運転から運休に変わる頃、学生から2名の学生が買い物に出かけたと引率教員に報告がありました。買い物に出かけた２名の学生は、大学内循環バスの運転手に注意され、滞在している寮までバスで帰ってきました。引率教員がその２名の学生に厳重に注意したところ、警報が出ていることは知っていましたが、この程度であれば日本の荒天時と大差ないという自己判断にて行動し、まだ買い物に行きたい様子でした。竜巻を経験したことが無く、その恐ろしさなどの実感が無いようでした。事前学習として、日本に居る頃から、研修大学所在地の気候や竜巻被害のことを課題とし、緊急時には現地教員の指示に従うということも厳重に指導していましたがこのようなことがありました。引率教員からは再度、天候の急激な変化とそれに伴う災害、取るべき行動、自分たちの勝手な行動が現地の人達に迷惑をかけること、また甚大な犠牲のあった地における無理解・無頓着な態度や行動は、現地の特性や文化、そして人々の心情に全く配慮していない状況であることを改めて説明しました。その後暴風雨となりましたが、竜巻までには至りませんでした。

後日、研修先大学内のミュージアムにて、竜巻被害時の記録を見学し、日本の東日本大震災と同様に甚大な被害に遭い、辛い思いをしながらも、同じように復興に向けて進んでいることを知りました。天候の変化、それも日本では経験したことの無い急激な変化、その結果としての被害の甚大さは想像に難く、迅速で正しい対処行動も必要となるため、事前からの学習とシミュレーションなどが必要になります。特異な気象事象が発生しやすい地理学的特徴、気候とその急激な変化、そしてその被害と長い歴史も、文化でもあり配

慮と対処すべき事項でもあります。引率教員はそうしたことに関する学習、感受性の涵養、そして実際の避難行動などを留学プログラムに含める必要があります。引率教員自身も日頃から国内はもとより海外の気候や災害に敏感となり、情報を収集する必要があります。

３．現地国空港での乗り継ぎ便

日本から海外研修プログラム開催大学に向かう往路での出来事でした。現地国に到着し、空港での国内線乗り継ぎ時に、搭乗予定の便に遅延が発生していました。しかし、ひとりの引率教員と学生は搭乗ゲートのカウンターの表示や、発着情報の表示が見えない離れたところに集まって座り、おしゃべりしており、自分達が搭乗する予定の飛行機が遅延していることにも気づかず、誰もカウンターの状況や表示を見に行くといったことをおこなっていませんでした。そうしたところ、カウンター上の小さな表示が搭乗中に変わり、現地の言語でのアナウンスがあり、人々が搭乗を開始しました。教員と学生達はそれに気づかず、おしゃべりを続けていました。カウンター付近にて情報収集を行っていた別の引率教員に注意喚起され、慌てて荷物を持って搭乗を開始しました。おしゃべりしていた教員は大学間の連絡担当でしたが、飛行機の遅延による現地到着が遅れることを、研修先大学の最寄り空港で待機する担当者にも連絡していませんでした。研修先に向かう自分達の搭乗する飛行機であり、また遅延があるにもかかわらず、乗り継ぎに関して無頓着でした。万が一乗り遅れる、あるいは搭乗ゲートが変更になっても気づかず乗ることができないとなれば、次の便の手配やスケジュール調整、追加料金の発生など、学生の安全と研修プログラムの遂行等に多大な影響が発生することになりかねません。日本語であればまた別ですが、特に現地の言語や英語でのアナウンスを十分に理解できない場合、またさらに遅延発生などの場合、積極的な情報収集や行動が必要です。学生も教員も自己責任の下、主体的に行動する事が必要です。

４．在宅患者宅へのアウトリーチ

海外研修プログラムの中に在宅患者宅へのアウトリーチがあり、訪問前カンファレンスでの患者紹介時に、対象患者が結核に罹患し治療中であることがわかりました。アウトリーチチームの医師が引率教員に、「結核にて内服治療を開始したところだが、学生も同行するか、やめておくか」と尋ねました。尋ねられた引率教員は、英語の聞き取りと語彙力等が十分でなく、何を尋ねられているのかわかりませんでしたが、同行していた別の教員が、感染のリスクにより患者との接触を避けるべきであると判断し、医師に同行辞退を伝えました。その結果、別の、感染症の無い患者宅への訪問に同行することとなりました。病院のような医療施設であれば、感染に関するプリコーションや注意喚起につながる視覚的情報も多く、周囲の医療者にすぐに質問することもできますが、今回のような在宅訪問など、医療施設ではない場所での活動の際には厳重な注意が必要です。

Ⅳ．国際交流活動・海外研修における危機管理について

大学が担う教育・研究・社会貢献活動は多様であり、社会・地域の状況により様々な回避すべきリスクがある。

国際交流活動や海外研修における危機は、学生や教職員個々の心身の健康状態上のものから、事故や災害、犯罪、紛争、テロなど、地域的にも関与人数からも大規模で非常事態に至るものが想定される。

学生・教員の国際活動における安全管理に関する指針は、文部科学省をはじめとする関係機関より示され、各大学独自の取り組みも多く整備されてきている。

危機管理体制の整備には、情報伝達経路、意思決定プロセス、行動規範を予め用意し、安全教育を行うことが含まれる。さらに、危機管理体制を評価する上で、これらのマニュアルの整備にとどまらず、大学の法的責任リスクの洗い出し、当事者による具体的な危機対応初動シミュレーション、メディアトレーニングが推奨されている。

本項では、学部学生の国際関係科目での海外研修準備の一部として実施した海外研修危機管理シミュレーションの一例を示す。シナリオは過去の海外研修トラブル例を参考に設定した架空の事例である。なお、示した対応例は一例であり、組織独自の海外研修危機管理マニュアルや組織図、意思決定機構によって当事者によって合議されるべき事柄であることから、いわゆる危機管理対策本部機能について示していない。それぞれのケースで、海外研修に参加する学生と保護者、引率にあたる教職員とその連絡に応じる国際担当教職員に想定される行動について示した。

1．海外研修危機管理シミュレーションに関する参考資料・ウェブサイト

1） 文部科学省
学生等の海外渡航時における安全管理
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1368029.htm 2018/2/11
大学における海外留学に関する危機管理ガイドラインチェックリスト
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/__icsFiles/afieldfile/2017/04/17/1384531_01.pdf 2018/2/11

2） 日本学術振興会
大学の世界展開力強化事業～アジア諸国等との大学間交流の枠組み強化～タイプB採択校連絡会（平成28年10月24日開催）
資料3「大学等における国際的な活動の活発化に伴う危機管理等について」2018/2/11
https://www.jsps.go.jp/j-tenkairyoku/data/renrakukai/h27/03_kikikanri.pdf

3） 独立行政法人日本学生支援機構配布
永橋洋典:国際交流における危機管理体制-危機管理体制の構築の課題-.
ウェブマガジン「留学交流」47(2);49-56,2015
http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2014/__icsFiles/afieldfile/2015/11/18/201502nagahashihirobumi.pdf 2018/2/11
服部誠:リスク管理体制の構築-海外危機管理の例-.大学と学生,14-19,2008
http://www.jasso.go.jp/gakusei/archive/dtog/__icsFiles/afieldfile/2015/11/17/daigaku533_06.pdf 2018/2/11

4） 外務省海外安全ホームページ
海外邦人事件簿一覧
http://www.anzen.mofa.go.jp/jikenbo/jiken_index.html 2018/2/11

5） 特定非営利活動法人 海外留学生安全対策協議会JCSOS 協議会活動
一橋大学 海外危機管理シミュレーション
http://www.jcsos.org/kiji_disp.cgi?mode=activity&k=20080331_01 2018/2/11
杏林大学 海外危機管理シミュレーション
http://www.kyorin-u.ac.jp/cn/html/kyorin/00003/201208022/ 2018/2/11

6） 各大学取り組み例
九州大学「危機管理シミュレーション」実施報告（2017.09.27）
https://www.kyushu-u.ac.jp/ja/topics/view/1247 2018/2/11
京都大学「海外危機管理シミュレーションを実施しました（2017年2月1日）」
http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/events_news/department/africa/news/2016/170201_1.html 2018/2/11
大阪大学外国語学部 [2014.2.28]危機管理シミュレーションを実施
http://www.sfs.osaka-u.ac.jp/news/post_13.html 2018/2/11

2．海外研修を前提とした国際関係科目の概要の一例

科目シラバスに示された学修目標に関するものに加えて、渡航手続きに関するもの、安全・危機管理に関するものを含む。このうち、学修目標は、履修者に共通する課題と、研修国によって学ぶ内容が異なるものが含まれる。科目責任者は、学修の順序性とタイムリーな渡航手続きを十分考慮して内容を構成し、学修と手続きの実務担当者を明確にし、進捗を管理していく必要がある。海外研修を前提とした国際関係科目活動の一例を示す。

時間数	内容
1	科目ガイダンス【講義】 目標、学修のすすめ方、グループワーク、課題、提出物、評価、報告会 担当教員紹介、渡航準備日程確認
2	研修国の情報収集①【グループワーク】 歴史、国の成り立ち、社会・経済情勢、人種・民族、宗教、文化的背景など 健康指標　平均寿命、死亡原因、乳児死亡率、保険制度など 教育制度、医療専門職の資格、看護師養成課程など
3	研修国の情報収集②【グループワーク】 気候、衣生活、食事、飲料水、交通、挨拶、マナー 観光地、物価、買い物、若者文化など
4	グループディスカッション【グループワーク】 ①研修国を理解する上で散っておくべき史実、現在の社会状況 ②研修国の保健医療福祉の課題、海外研修で学びたいこと
5	海外渡航における健康管理【講義】
6	文化看護、看護師の文化能力【講義】
7	研修国でのコミュニケーション【グループワーク】
8	海外研修における危機管理と安全行動について【講義】 外務省ホームページ、海外研修危機管理マニュアル
9	事前学習報告会準備【グループワーク】
10	事前学習報告会準備【グループワーク】
11	上級生からの情報提供、旅行準備説明【講義】
12	**危機管理シミュレーション**【グループワーク】※次ページより展開例を示す
13-15	事前学習報告会【グループワーク】 旅行日程読み合わせ、文化交流活動準備【グループワーク】

3．海外研修危機管理シミュレーション展開例

目的　海外研修危機管理体制の構築とその運用手順の確認、対処行動・考え方の検証、危機管理意識の向上
目標　①海外危機管理シミュレーションを通して、想定される出来事への対処を実践できる
②それぞれの立場で十分に準備できていない部分を記載し、準備の確実さを確認できる
③シナリオのような事態を防ぐための対策を２つ以上列挙できる

海外危機管理シミュレーション
参加者：海外研修参加者
引率教員：
事前学習担当教員：
事務局担当者：

進め方
9時00分　二つのシナリオを確認　グループに分かれる
9時10分　奇数班は共通から、偶数班は班別シナリオから開始
トラブル発生はまず学生からスタート
学生、引率教員、国際室等の立場に応じて、連絡・相談を進める
電話・LINE・メールを使うところは適宜変更し、直接話すなどしてください
誰が、いつ、どんなアクションをとり、何を伝えたか、時系列で記録してください
9時30分　それぞれのシナリオを20分ずつで終了
9時50分　グループで振り返りのディスカッション
10時　全体発表、質疑応答、講評

班	研修国・地域	シナリオ		引率教員役①	引率教員役②	保護者役	トラブル種別
1	中国・台湾	共通	S9				体調不良・医療機関 交通事故
2	韓国	共通	S12				体調不良・医療機関 行動・迷子
3	韓国	共通	S7				体調不良・医療機関 対人関係・健康管理
4	ベトナム	共通	S11				体調不良・医療機関 アクティビティ
5	タイ	共通	S5				体調不良・医療機関 盗難
6	ラオス インドネシア マレーシア	共通	S4				体調不良・医療機関 行動・健康管理
7	オーストラリア ゴールドコースト	共通	S3				体調不良・医療機関 ホームステイ
8	オーストラリア	共通	S2				体調不良・医療機関 強盗・パスポート紛失

役割　事務局　　国際室役
　　該当学科役
　　海外研修健康管理センター役
準備する物　　危機管理マニュアル（学生版）、危機管理マニュアル（教職員版）、ホワイトボード（事務局）
シナリオ　　各グループ2つ　共通＋各国事情に応じたものＳ１～12

シナリオ

共通：研修生である学生の一人が40℃を超える発熱がある
　　現地の医療機関に受診するとインフルエンザと診断され、隔離を指示された

各国事情に応じたもの
S1：研修地で爆発事件があったという噂を聞いた
S2：学生が夜間外出中、二人組の男性に絡まれ、ポーチを差し出した。現金と共にパスポートを奪われた
S3：ホームステイ先の家族がピックアップの約束の場所に現れない
S4：体がだるく熱を測ったら38.3℃だった。前々日屋外でスマホに夢中になり、数十か所蚊に刺されていた
S5：ホテルの部屋においていたはずのパソコンが研修から戻るとなくなっていた
S7：同室者とうまくいかず、眠れない食欲もなく体調も悪い、一刻も早く家に帰りたい気持ちである
S9：友人と買い物にでかけたところ、オートバイと衝突した。足から血が出ており、痛くて歩けない
S10：友人と食事に出かけたところ、現地の人にドライブ、食事に誘われた
S11：現地の人が滝つぼへダイビングをして楽しそうである。涼しいから飛び込めと誘われた
S12：友人が、頼まれたお土産が買えていないから遠くの店までついてきて欲しいと帰国前夜に言われ、
　　地下鉄に乗って買い物に出た。Wifiが使えなくなり、迷子になった

◎海外危機管理シミュレーション記録
シナリオ：

日時　　誰が、誰に、誰と、何を、どのように・・・・できるだけ詳しく

◎海外危機管理シミュレーション記録
シナリオ：
日時　　誰が、誰に、誰と、何を、どのように・・・・できるだけ詳しく

◎振り返り

◎トラブルを未然に防ぐために

◎対応例　**（それぞれの危機管理対応マニュアル・フローチャートに準じて策定する）**

シナリオ：　共通

日時　　誰が、誰に、誰と、何を、どのように・・・・できるだけ詳しく

7:00　学生A　朝食会場で顔が赤くぐったりしている　朝食を食べていない

「昨日から熱い、体が痛い、頭が痛い、食欲がない」

引率①　体温測定　40.2℃　食事　排便　上気道症状　咳嗽　頭痛　項部痛など他の症状確認

7:20　引率①＋引率②　学生の情報を共有　他の学生の健康状態を確認、特に同室者、同じ車を利用している学生

7:30　引率①　大学健康管理センターへ電話相談

7:40　大学健康管理センター　引率①に受診するよう指示

日本国内キャンパス国際担当に状況報告、情報共有

キャンパス国際担当者　学科長に状況報告

引率①＋引率②　役割分担を相談　学生Aと共に受診する人　他の学生と行動する人

7:50　引率A　海外旅行保険ダイヤルへ受診相談

医療機関の選定　医療機関へ連絡または保険会社からの連絡待ち

タクシーの手配

現地受け入れ先担当者に相談（現地医療機関受診についての情報収集）

8:00　引率B　その他の学生と予定通り行動　または　集合時間を遅らせるなど受入先担当者と調整

9:00　引率A　学生Aの受診に同行　健康状態調査票、パスポート、保険関係書類、タクシー代往復、

10:00　医療機関　インフルエンザ診断

12:00　内服薬処方　救急室での輸液

引率A　大学健康管理センターへ報告

現地受入先担当者に宿舎の部屋移動または　1室追加予約について相談

大学健康管理センター　　日本国内キャンパス国際担当に状況随時報告

キャンパス国際担当者　　学科長に状況報告、保護者対応

引率A　引率Bに報告

13:00　学生A　救急室で輸液を受ける

引率A　学生Aにつきそう　マスク、飲み物、飴玉、お菓子など持参しておく

学生A　自宅へ連絡　場合によっては引率Aが保護者へ連絡

未然に防ぐために…

- 体力づくり
- 十分な睡眠、食事、水分
- 航空機でのマスク着用
- 早めに熱を測る、自己申告、相談

14:00　学生A　輸液が終わる　少し元気になる

15:00　引率A　タクシーを手配する

学生Aが食べられるもの、飲み物を調達する

宿舎に戻る

16:00　引率A　宿舎に部屋について相談する　学生の部屋移動か　1室確保

学生A　1人部屋の状態で休む

学生A　自宅に連絡

引率A　大学健康管理センターへ報告

17:00　引率A＋引率B　情報交換　対応を検討　学生の見守り方法

研修参加と欠席方法　役割分担など

18:00　引率A　夕食、学生Aへの見回り、体調チェック

引率B　学生Aの食事の手配、他の学生の体調チェック

◎対応例　**（それぞれの危機管理対応マニュアル・フローチャートに準じて策定する）**

シナリオ：S3　学生が夜間外出中、二人組の男性に絡まれポーチを差し出した。現金と共にパスポートを奪われた

学生A　　警察へ連絡
学生B　　引率教員①へ連絡
引率教員①　引率教員②へ連絡
引率教員①　学生から現場の場所を確認　受入担当者に連絡　警察への連絡
引率教員A　引率教員Bと役割確認
　　タクシーの手配　現場へ向かう
引率教員B　日本国内キャンパス国際担当者へ連絡
国際室　　盗難被害の確認
　　パスポート再発行にかかる手続きにして指示
　　日本国内キャンパス国際担当者へ連絡
キャンパス国際担当者　学科長に報告
引率教員A　学生A学生B　盗難届、捜査協力、受入担当者に相談
　　タクシー手配、宿舎に戻る
引率教員A　引率教員Bに報告
　　パスポート再発行手続きの確認
　　パスポート申請手続き同行と研修引率の役割分担
　　国際室に連絡
国際室　　キャンパス国際担当者に連絡
キャンパス国際担当者　学科長に報告、保護者対応
学生A　　自宅へ連絡

未然に防ぐために…

- パスポートは別に身につける
- 夜間外出しない
- 人気のないところに行かない
- パスポート再発行用の写し・写真を準備しておく

◎対応例　**（それぞれの危機管理対応マニュアル・フローチャートに準じて策定する）**

シナリオ：S3　ホームステイ先の家族がピックアップの約束の場所に現れない

学生　　ピックアップの役割の人の携帯電話へ連絡
　　電話にテキストメッセージの送信
　　待ち合わせ場所に待機
HF（ホストファミリー）　・・・・・反応なし・・・・・
学生　　引率教員①に電話
引率教員①　HFに電話　約束の場所で待機
学生＋引率教員①　安全な場所に移動
　　HFに連絡を取り続ける
引率教員①　HF改めてピックアップ場所・時間の約束
　　場合によってはタクシーの手配
学生　　HFと共に帰宅

未然に防ぐために…

- 約束の時間を守る
- 「何月何日何時どこ」を毎日確認し、確実にする
- 口頭だけでなく、メモに書いて約束する
- 間に合わないときは連絡する

◎対応例　**（それぞれの危機管理対応マニュアル・フローチャートに準じて策定する）**

シナリオ：S4　体がだるく熱を測ったら38.3℃だった。前々日屋外でスマホに夢中になり数十か所蚊に刺されていた

共通シナリオに準ずるが、

デング熱の可能性を考慮し、診断できる医療機関を念頭に医療機関選定にあたる

受け入れ先病院を含めて、現地医療機関の情報収集に努め、現地担当者と密に連絡を取りながら行動する

診療内容　検査・輸液等について適宜説を求め、適切な医療が受けられるよう万策を講ずる

未然に防ぐために…

- 蚊除け対策は何重にも講じる
- 虫よけ現地で買うだけではだめ、日本から必ず用意
- 服装、行動、四六時中！

◎対応例　**（それぞれの危機管理対応マニュアル・フローチャートに準じて策定する）**

シナリオ：S5　ホテルの部屋において出かけたはずのパソコンが戻るとなくなっていた

学生A　　部屋の中を探す
　　ホテルのフロントを訪ねパソコンについて尋ねる
　　引率教員①へ相談
引率教員①　状況を確認する　引率教員②と相談
　　ホテルのフロントを訪ねパソコンについて尋ねる
　　受入担当者に相談する
ホテル　　警察へ連絡する
引率①＋学生A　盗難届、捜査協力
引率教員①　国内キャンパス国際担当者へ連絡
国際室　　盗難被害の確認
　　帰国後保険の手続きについて案内、記録しておく
学生A　　自宅へ連絡

未然に防ぐために…

- スーツケースに毎日荷物を格納し、施錠
- 旅行用のチェーンロックや小さい南京錠もあると便利
- 部屋に放置していったものは捨てられると思え！
- ホテルの掃除の人には挨拶をするなどして面識をもつ

◎対応例　**（それぞれの危機管理対応マニュアル・フローチャートに準じて策定する）**

シナリオ：S7 同室者とうまくいかず、眠れない食欲もなく体調も悪い、一刻も早く家に帰りたい気持ちである

学生A　　同行の学生に相談する
　　引率教員①に相談する
引率教員①　学生Aの話をきく　困っていること、体調、
　　研修期間中の出来事
　　他の学生の協力を得られるよう調整する
　　場合によっては部屋の移動を検討
　　学生Aが研修期間を乗り越えられるよう一緒に
　　考える
学生A　　仲の良い友人や家族に連絡　苦しみをわかってもらい
　　励ましてもらう
　　何とか楽しめるようになる

未然に防ぐために…

- 同室者とお互いの生活スペース、スタイルを尊重して過ごす
- 音楽、スマホ、食べ物、ゴミ、お風呂、洗濯、トイレなど
- みんなが仲良く過ごせるよう共通の話題や遊びなどする時間を設ける

◎対応例　**（それぞれの危機管理対応マニュアル・フローチャートに準じて策定する）**

シナリオ：S9　友人と買い物にでかけたところ、オートバイと衝突した。足から血が出ており、痛くて歩けない

学生A　警察へ連絡

学生B　引率教員①へ連絡

引率教員　引率教員②へ連絡

引率教員①　学生から現場の場所を確認　受入担当者に連絡　警察への連絡　（救急車の要請）

引率教員A　引率教員Bと役割確認

タクシーの手配　現場へ向かう

海外旅行保険　相談ダイヤルへ受診相談

医療機関の選定　医療機関へ連絡または保険会社からの連絡待ち

現地受け入れ先担当者に相談（現地医療機関受診についての情報収集）

引率教員B　国内キャンパス国際担当者へ連絡

キャンパス国際担当者　学科長に報告、保護者対応

引率教員A　学生B　事故の検分、受入担当者に相談

タクシー手配

病院に受診

受入担当者と共に検査・診断・外傷処置・予防接種等詳細に関与

適切な治療が受けられる医療機関への搬送・帰国も考慮する

学生A　自宅に連絡

宿舎に戻る

引率教員A　引率教Bに報告

キャンパス国際担当者に連絡、対応の検討

学生A　自宅へ連絡

未然に防ぐために…

●道路の横断時には特に前後左右をよく見て絶対に交通事故にあわないようにする

●高度な医療を受けられない国・地域では、生命の危機・後遺症の心配があることを忘れない

◎対応例　**（それぞれの危機管理対応マニュアル・フローチャートに準じて策定する）**

シナリオ：S10　友人と食事に出かけたところ、
現地の人にドライブ、食事に誘われた

「グループ旅行なので、行けません」と断る

未然に防ぐために…
- 現地で知らない人の車、白タクに乗ってはいけない
- 一般的な家族連れがいるお店などで食事をする
- 現地の人にしかわからないような場所・店に出入りしない
- 団体旅行であり、滞在先を離れることはできない

◎対応例　**（それぞれの危機管理対応マニュアル・フローチャートに準じて策定する）**

シナリオ：S11　現地の人が滝つぼへダイビングをして
楽しそうである。涼しいから飛び込めと誘われた

「研修旅行なので、できません」と断る
「泳げませんので、できません」と断る

未然に防ぐために…
- 外傷や溺水は救助救命する仕組みがありません
- 運よく助かっても将来や留年など影響があります
- 川の水・土壌には病原体が無数にいます
- 命のリスクと楽しみをよく考えて行動してください

◎対応例　**（それぞれの危機管理対応マニュアル・フローチャートに準じて策定する）**

シナリオ：S12：友人が、頼まれたお土産が買えていないから遠くの店までついてきて欲しいと帰国前
夜に言われ、地下鉄に乗って買い物に出た。Wifiが使えなくなり、迷子になった

学生　自分のいる場所を確認する
大きな目印、建物、お店などに入り落ち着く
外出先と宿舎の住所を再確認する
地下鉄の駅を探す、人に聞く
地下鉄の駅の人に宿舎への帰り方を聞く
引率教員①に電話する　帰り方が正しいか確認する

引率教員①　学生の居場所を確認する
帰り方を指示する
引率教員②と相談
場合によってはタクシーを手配し、迎えに行く
国内キャンパス国際担当者に連絡
引率教員②と役割分担

キャンパス国際担当者　報告を受け記録する

未然に防ぐために…
- 外出先を事前にはっきりさせる　住所・地名・地図
- ガイドブック・紙の地図を携行する
- 警察・ホテル・お店など信頼できそうな人に迷子になっていること、行きたい場所を伝える
- 公衆電話の掛け方、人に電話をかけてもらう会話を修得しておく
- 滞在先・宿舎の住所は紙に書いて持ち歩いておく
- 夜間外出は極力避ける
- 買い物や外出は計画的に行う

Ⅴ．看護職が経験する異文化体験とその対応

看護職が、その国や地域の状況を知らないことで、海外研修先や日本の職場でも「患者のわがまま」あるいは「患者からクレームを言われた」と思ってしまうことがあります。これらのほとんどは、お互いの違いに気づいていれば誤解を少なくすることができると考えられます。外国旅行で、トイレの利用方法、食事のマナー、交通ルール、料理の味、宗教など、日本との違いに気づくこともあります。看護職がよく出会う違いについて例をあげて、異文化体験とその対応について考えてみたいと思います。

１．民間療法

東南アジア地域には、民間療法がよくみられます。背中に真っ赤な線の痕が何本もついていて、よく見ると、コインなどで圧迫した線のようです。初めて見た時には驚くかもしれませんが、虐待や暴力などではないということです。まるい火傷のようなあざが残る灸も、身体的虐待の印と誤解されることもあります。

このような民間療法の可能性がある場合は、よく観察して丁寧に本人や家族に聞いてみることが大切です。

２．ハラル認証

食事では、ハラルフードをあげることができます。宗教的に禁止されている材料が入っていないことと同時に、トレーサビリティも厳重にチェックされています。特に、イスラム教で禁止されている豚肉、酒類が含まれていないこと、魚類や他の肉類もイスラムの方式で加工され輸送していなければなりません。また、ハラル認証は厳密には、食材だけではなく化粧品や医薬品にも求められています。病院で処方された薬を、ハラル認証がないために服用しない可能性も考えられます。ハラル認証の有無だけでなく、その厳密さの程度も含めて個別の情報収集が必要になります。

３．家族が病院に泊まりたい

病院へのお見舞いと家族の付き添いについても、大きな違いがあります。看護職の絶対数が不足している国や地域では、家族が入院中の病院に泊まりこんで療養の世話を行っています。そのような外国人が日本の病院に入院した場合は、家族が病院に泊まれないということは、病院では何もしてもらえないと想像して驚くのです。必死になって泊まりたいと訴え続ける家族がいた場合には、その国の状況を聞き、日本ではしっかり看護職がケアをするから大丈夫だと安心していただき納得できるよう支援することが必要になります。

４．お見舞い

お見舞いの家族や友人が、ものすごい人数で1日中楽しそうに病室にいることがあります。これは、普段から大家族で生活しているため、病院に1人でいるのは寂しすぎるから、あるいは入院したことが可哀想で励まそうとしている行為と考えられます。人々にとって病院というのは嫌な場所であり、1日でも早く家に帰りたいと本人も家族も考えているからといえます。「家族は、泊まれません」「お見舞いは午後からです」と、日本人と同じように規則を説明することも重要なのですが、時間がかかっても本人や家族の気持ちを聞くことで、私たちの学びの機会とすることができます。

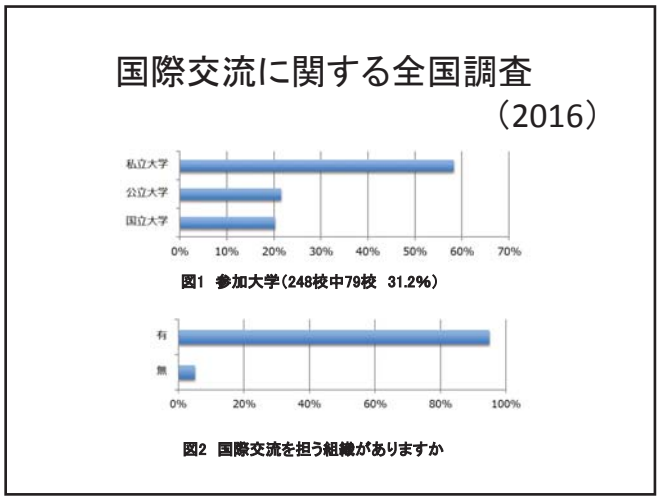
５．むやみに触らない

アジアの国々では、人の頭の上には神様が宿っていると考えることが一般的です。安易に子どもの頭をかわいいという理由でなでると、これは親から怒られてしまうことになりかねません。日本人にはすぐに理由がわからないので、これはとても難しいケースとなります。怒っている相手にひるまず、怖がらず、「なぜ怒るのか？」と説明を聞くことが大切です。こちらも、日本の習慣を説明する機会を与えてもらい、誤解を解くことで相互理解をすすめる機会ととらえます。

Ⅵ．グローバル時代の看護系大学における FD とキャリア支援

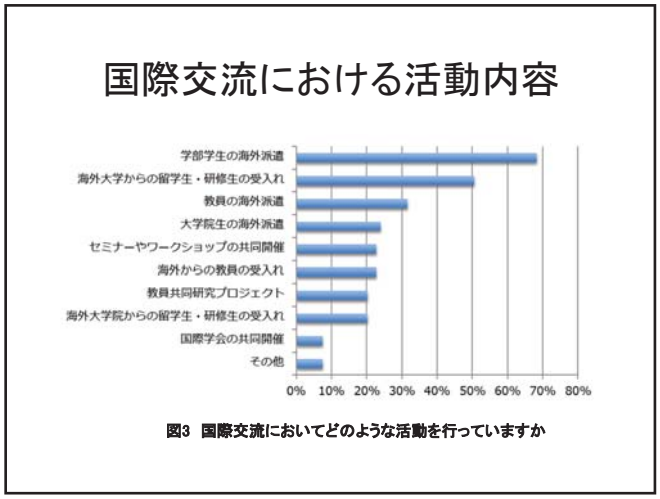
－国際活動委員の教員の経験から－

高等教育分野において国際化が急速に進められる中、本報告書 2016 年版の調査参加校の看護系大学の 95%に国際活動（交流）委員会が設置されている。しかし、担当教員の負担感は大きく、FD（Faculty Development）のニーズは高い。本研究の目的は、教員の国際活動委員の経験が、自己の成長やキャリア発展にどのように影響しているのかを質的に記述し、国際活動推進のための FD コンテンツの開発について、キャリア支援の視点を踏まえて検討することである。本研究の中間報告として、これまでのまとめを述べる（スライドは、第 37 回日本看護科学学会（仙台）2017 における口演発表の抜粋である）。



背景について、2016 年に実施した国際交流に関する全国調査の結果からみる（本報告書 2016 年版）。（看護系大学 248 校を対象に、2016 年 1～2 月 Web 調査実施分）

・参加大学は 31.2%であった
・参加大学のうち、95%に国際交流を担う組織がみられた。



・国際交流における活動内容（複数回答）は、学部学生の海外派遣 54 校（68.4%）と最も多く、海外からの留学生・研修生の受け入れ 40 校（50.6%）、教員の海外派遣 25 校（31.7%）、大学院生の海外派遣 19 校（24.1%）、海外からの教員の受け入れ 18 校（22.8%）、セミナーやワークショップの共同開催 18 校（22.8%）と続いた。

国際交流の今後の課題

学生の学び、共同研究の推進、組織のグローバル化（FDやSD)の推進のために、看護系大学間の継続した情報共有と協力が有効と考える。

⬇

担当教員の負担感は大きく、FDのニーズは高い

2016 年全国調査では、国際交流について成果があると感じられること、一方で困ったことや困難を感じることがあげられた。成果を共有し、困難を解決してゆくためには、看護系大学間の継続した情報共有と相互協力が必要と考えられた。

現状では、担当教員の負担感は大きく、FD のニーズが高いことが示された。

目　的

1. 教員の国際活動委員としての経験が、自己の成長やキャリア発展にどのように影響しているか質的に記述し
2. 国際活動推進のためのFDコンテンツの開発について、キャリア支援の視点を踏まえて検討すること

そこで本研究では、教員の国際活動委員としての経験が、自己の成長やキャリア発展にどのように影響しているか質的に記述し、国際活動推進のためのFDコンテンツ開発に、キャリア支援の視点を踏まえて検討することとした。本報告は、その中間報告である。

方　法

- 対象　国際活動委員を1年以上経験した看護系大学の教員9名（機縁法）
- 方法　フォーカスグループインタビュー（FGI）3か所、1回およそ90分
- 倫理的配慮　千葉大学大学院看護学研究科倫理審査委員会承認（28-110）

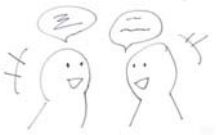
図4　FGI開催地

国際交流委員を 1 年以上経験した看護系大学の教員を機縁法で 9 名選定し、国内 3 カ所（東京、神戸、福岡）でフォーカスグループ・インタビューを実施した。ファシリテーターがインタビューガイドを用い、1 回およそ９０分のインタビューを行った。倫理審査は、所属大学の承認を得て実施した。

インタビュー内容

1. 国際活動委員の経験から自分自身が学びを得たこと

2. 国際的研究活動などの展開とその準備について



インタビュー内容は、１．国際活動委員の経験から自分自身が学びを得たこと、２．国際的研究活動などの発展とその準備等についてであった。

結果　国際活動委員の経験からの学び

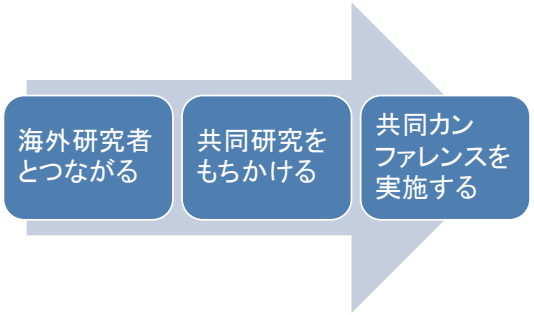
- 交渉の過程、学生への配慮、事前相談などプログラム作成のプロセスを学ぶことができた。自分の考えの狭さにも気付いた。医療制度の相違など海外との違いを実感した。
- 現地の学習スタイルを自分の授業に活かせる。学生の自主性を高める工夫が参考になった。
- 他国の状況に興味が湧いて、共同研究をしたくなった。ワクワクする。

参加者の国際活動委員としての経験内容は、学生の渡航の引率から留学生等の受け入れまで、多岐にわたっていた。

結果　国際活動委員の経験からの学び

国際活動委員の経験から自分自身が学び得たこととして、ＦＧＩの内容は、「組織的対応の重要性」「教育者としての成長（自己の成長を含む）」「研究者としての成長（社会貢献を含む）」の３つに分類された。

結果　次の段階への発展



国際的研究活動などの発展として、「アテンドや打合せ等の機会を通して、海外研究者とつながる」「個々のつながりを活かして研究の相談や、共同研究をもちかける」「共同カンファレンスを実施する」といった教員の能力発展の成果につながる経験が述べられた。

考　察

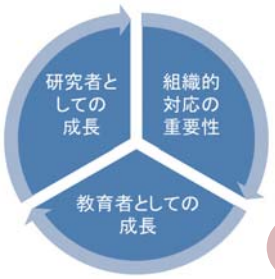


図　国際活動委員の経験からの学び
（本研究結果より）

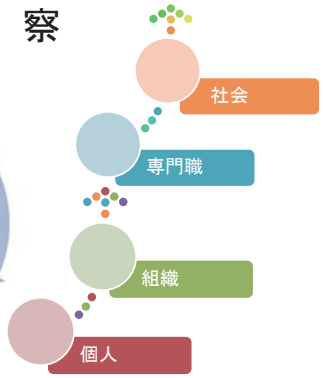


図　ダイバーシティのレベル
（Dr. Azita Emami　Keynote）

本研究より、グローバル時代の看護系大学における FD では、学生や教員の国際活動（受入れや派遣）を通した多様な経験が、教員の FD につながっていることが示唆された。

グローバル時代の看護系大学における教員の能力開発（FD）において、国際活動委員の経験は多様性（ダイバーシティ）を広げる具体的な機会になると考える。

まとめ

国際活動委員の経験のFGインタビューの結果からFDコンテンツとして、組織的対応、教育者としての成長、研究者としての成長があげられた。
様々な海外との交流の経験をその場限りにすることなく、グローバル時代の看護系大学におけるFDキャリア支援として発展させることの必要性と可能性が示唆された。

今後、組織的な環境整備やキャリア支援などの課題に取り組む必要性が改めて示された。調査にご協力いただきました大学の皆様に深謝いたします。

参考文献：野地有子、近藤麻理、小寺さやか、飯岡由紀子、溝部昌子、炭谷大輔（2016）：「10 年後を見据えたグローバル人材育成・国際交流の推進」コンテンツ報告書，19-38.

看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用の推進
平成29年度　看護学教育FDマザーマップ・コンテンツ開発

「10年後を見据えたグローバル人材育成・国際交流の推進」
コンテンツ報告書Vol.2

発行日　2018 年 3 月 30 日

編集発行者　看護学教育研究共同利用拠点
千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター
FDマザーマップ・コンテンツ開発委員会（国際交流班）
野地有子，溝部昌子，近藤麻理，小寺さやか，野崎章子，炭谷大輔
〒260-8672
千葉県千葉市中央区亥鼻１丁目８番１号
TEL　043-226-2378
URL　http://www.n.chiba-u.jp/center/

制作・印刷　（有）B・D・S
千葉県千葉市若葉区小倉台4丁目8番7号
TEL　043-214-8551